

ICT 活用部会

部会長：附属中学校 渡邊光輝

部会員：附属中学校 藤倉 遼介

附属高等学校 植田 敦子・山上 通・玉谷 直子

部会紹介：

「対話を活性化する ICT の活用」

本部会では、「対話を活性化する ICT の活用」を切り口に、日常的に授業実践を持ち寄りながら、ICT が学びの質の向上や資質・能力の育成にどうつながるかを検討してきた。

Google ドキュメントによる同時編集や Padlet を活用した意見の構造化など、生徒同士の対話を促進する具体的な手立てを共有し、各教科・発達段階での効果や課題を議論している。

また、生成 AI についても実際の授業や教材づくりでの活用例を持ち寄り、批判的・創造的に活用するための可能性を探っている。

ICT を「教員のための道具」から「生徒の学びを支える道具」、さらには「学びを広げる環境」として捉え直そうとする日々の実践の積み重ねが、今後の教育のあり方を考える上での一つの手がかりとなればと考えている。

「対話を活性化する ICT 活用」

ICT 活用部会
附属中学校 渡邊 光輝

（１）当該テーマに関する本部会の課題

本部会では、「お茶大コンピテンシー等の育成に関する幼小中高大の接続を意識した開発研究」に対して、「対話を活性化する ICT の活用」を切り口に取り組んできた。ICT 活用を単なるデジタルツールの導入ではなく、「学びの質の向上」や「思考・対話・協働」といった資質・能力の育成にどう結びつけていくかが大きな課題であった。

また、附属中高両校において整備された一人一台端末環境を前提に、教科における ICT の活用実践を交流しながら、各発達段階に応じた「対話力」や「情報活用能力」の育成について議論した。特に、生徒の思考過程の可視化や相互の学び合いの促進に向けた工夫が重要であるとの認識を部会全体で共有した。

加えて、急速に発展する生成 AI の出現を受け、「情報活用能力」の新たな定義を含むリテラシー教育の再検討も喫緊の課題として位置づけ、これまでの ICT 活用の枠組みを超えた探究も進めた。

（２）課題に関する本部会の取り組み

本部会では、「お茶大コンピテンシー等の育成に関する幼小中高大の接続を意識した開発研究」に対して、「対話を活性化する ICT の活用」を切り口に取り組んできた。ICT 活用を単なるデジタルツールの導入ではなく、「学びの質の向上」や「思考・対話・協働」といった資質・能力の育成にどう結びつけていくかが大きな課題であった。

また、附属中高両校において整備された一人一台端末環境を前提に、教科における ICT の活用実践を交流しながら、各発達段階に応じた「対話力」や「情報活用能力」の育成について議論した。特に、生徒の思考過程の可視化や相互の学び合いの促進に向けた工夫が重要であるとの認識を部会全体で共有した。

加えて、急速に発展する生成 AI の出現を受け、「情報活用能力」の新たな定義を含むリテラシー教育の再検討も喫緊の課題として位置づけ、これまでの ICT 活用の枠組みを超えた探究も進めた。

本年度は毎月、附属中学校・高等学校の国語科・社会科・情報科を中心とした ICT 活用の授業実践事例を持ち寄り、具体的な活用方法やその成果・課題について意見を交換した。

とくに生徒間の「対話」を促進する手段として、以下のような実践が共有された。

- Google ドキュメントによる同時編集と話し合いの記録化
- Padlet や Jamboard による意見の分類・構造化
- 授業内での「即時共有→相互参照→再構成」というサイクルの構築

これらを通して、ICT が単なる情報伝達の手段を超え、「他者との対話を通して自分の考えを磨く」場をつくる媒体となる可能性を確認できた。

また、校務 DX に関しても意見交換を行い、校務支援システムや保護者・生徒との連絡手段の改善、情報共有の効率化についての課題と工夫を共有した。現場に即した ICT 活用の視点から、教職員間の連携にも効果をもたらすことが分かった。

さらに、生成 AI に関しては、授業支援や教材作成、校務効率化など多角的な視点から活用の可能性を探り、毎回ハンズオン形式で実際の使用例を試行した。たとえば、

- 要約文の生成と人間による再評価
- 生徒の問いに対する AI の回答とその批判的検討
- 小論文作成時の構成案提示と比較

などのアプローチが紹介された。これらは、生成 AI を批判的かつ創造的に活用する姿勢を生徒に育てる上でも有効であると感じた。

なお、今年度の研究成果は、3 月に開催された「生成 AI 活用ワークショップ」として、他附属校園との共有を図る場を設け、実践の広がりや課題の共有に寄与した。

(3) まとめ

本部会の活動を通じて、ICT は「教員の道具」から「生徒の学びの道具」へと転換していく必要性を改めて確認した。ICT が生徒の思考の可視化や、他者との関係性の中での学びの深化に有効であることが実感され、対話を中心とした資質・能力の育成に向けた実践の蓄積がなされた。

また、生成 AI の活用は、新しいリテラシーを育てる教育の在り方に直結するものであり、特に中等教育段階における試行的な実践とその評価が、今後の指針となる可能性がある。

「幼小中高大の接続」という観点では、段階的な情報活用能力や対話スキルの育成を系統的に捉える必要があると再確認した。初等段階では「ICT を使うこと」への慣れ、中等段階では「ICT を使って考えること」、高等段階では「ICT を使って他者とともに考えること」へと段階的に深めていく接続のビジョンが重要であると考ええる。